

第3回 4大学間「学生交流自主的・実践的研究プロジェクト」
研究成果発表会

2 冒険遊び場 プレ-パ-ク



発表者 : 藤川 浩一さん

発表内容

題 目 : 冒険遊び場 プレ-パ-ク

研究者 : 島根大学 総合理工学部 電子制御システム工学科
藤川 浩一

島根大学 生物資源科学部 生物科
石塚 光一郎

冒険遊び場・プレーパーク
藤川 浩一₁ 石塚 光一郎₂

1. 島根大学総合理工学部電子制御システム工学科 4年
2. 島根大学生物資源科学部生物科 4年

はじめに

今のこどもは、外で遊ばずに家の中でゲームをすることが多く、仲間とあそぶ、自然と触れ合う、工夫して遊ぶということが少し苦手である。その理由の一つとして、こどもの遊びの欲求は昔と変わらないが、現状としてこどもたちが遊びたくなるような魅力的な遊び場が少ないと考えられる。

例えば、公園などでは、怪我や事故を未然に防ぐため様々な禁止事項があり、これがこどもたちの遊びが制限され、そのため魅力を感じなくなってはいないのだろうか。子ども達の生活様式も大きく変わり、昔はあたりまえにできた遊びや生活体験を今のこどもたちはできずに大きくなっている。自分たちの小さい頃を思い出して、そのような体験のできる場を地域の中につくりだそうと考えた。

特に幼児期には、自然の土や水や虫などとふれあい、五感を十分にひらいて満足するまで遊ぶことが大切である。しかし、まちの中の公園では、「遊べる自然」は苦情の種である。雑草がはえたぬかるみにならないように土を砂で固めたり、落ち葉が落ちない木を植えるなど、「きれいだけど遊べない自然」ばかりである。そこで、こどもの感性と体験を育む豊かな緑を、地域と関わりながらみんなで育てようと考えた。

また、地域や学校で、大人からの管理や干渉はあっても、心のふれあいを持つ場がないのがいまのこどもたちである。こどもたちには「心の基地」「居場所」が必要であり、そのこどもたちの発する信号を受けとめれる場として冒険遊び場・プレーパークをしようと考えた。

1. プレーパークの趣旨

I. プレーパークの趣旨

プレーパークとは、子どもたちのもつ「何かやってみたい」という好奇心や興味を大切にし、それを実現できるようにする遊び場である。従来の公園などの遊び場では、事故や怪我を未然に防ぐために多くの禁止事項を設けているが、プレーパークでは「**自分の責任で自由に遊ぶ**」ことをモットーとし、禁止事項を設けていない。そのため、いろいろなところに危険がひそんでいるといえるが、プレーパークは、「危険があるから自らも注意するし、冒険心、挑戦心もわく。少しずつ試してみるから自分の出来ないことがわかる。一人で出来ないから仲間と協力することを覚える。そして、その中で小さな怪我を繰り返すことで、はじめて大きな事故から**本能的に自分の身を守ることができる。**」という考えのもと、

ある程度の危険は必要だという立場をとっている。

また、プレーパークには「プレーリーダー」と呼ばれる大人がいる。プレーリーダーは、子どもの遊びのリーダーでもあり、子どもにとって大人の友達でもある。しかし、遊びだけがプレーリーダーの仕事ではなく、子どもが気づかない危険を未然に取り除いたり、事故に対処したりその役割は多面に及ぶ。プレーリーダーがいるからこそ、子どもは安心して自由に遊ぶことができるのである。

子どもの遊びの可能性を大切に、それを阻害することのない遊び場がプレーパークなのである。プレーパークの目標は、地域社会の中に根ざした、日常的な遊び場になることである。

II. これまでの経緯

現在、プレーパークは全国に180以上ある。2001年に松江でのプレーパークを立ち上げた。その当初、山陰地方には唯一のプレーパークであった。その後、持田のプレーパークが火付け役となり、現在では、松江市持田地区、同市城西地区、浜田市、鳥取県鳥取市、同県米子市の計5ヶ所にプレーパークが存在する。そのうち学生が主体となって活動をしているプレーパークは、私たちが活動している持田地区のプレーパークだけである。

2001年4月にプレーパークの開園・運営を行うボランティア団体を立ち上げる。同年、島根大学のサークルとして「プレプレまつえキッズ」となる。

2001年8月、松江市持田公民館の協力を得て、公民館が管理する旧持田小学校跡地にてプレーパークを開園する。以後月一回のペースで開園を行う。

2002年には、開園回数を月4回程度に増やす。また、「プレーパークの活動をもっと多くの人に知ってもらいたい」「持田以外での場所でも開園してみたい」という思いから、「デリバリープレーパーク」と称し、松江市内の公園を中心として、2か月に1回程度の持田以外での開園を行った。この年の開園は、持田でのプレーパークだけでのべ46回の開園を行い、年間約1340人の来園者が訪れた。

また、この年は冒険遊び場活動が大いに盛り上がり、前年度2ヶ所しかなかったプレーパークが3つ増えて5つになる。その動きにあたり、プレプレまつえキッズが中心となり、山陰地方の冒険遊び場活動のネットワーク化の第一歩となる「山陰プレーパークの会」を開催し、各々の活動報告等を行い、各プレーパーク同士いい刺激を受けることができた。

2. 活動の流れ

活動日			活動内容
2004年	4月	10(土)・11(日)	デリバリープレーパーク(菅田公園)
		18(日)	もちだプレーパーク(旧持田小学校跡地)
		24(土)・25(日)	〃
	5月	1(土)・2(日)	〃
		8(土)・9(日)	〃
		15(土)・16(日)	デリバリープレーパーク(北公園)
		21(金)	・H15年度活動報告会
		22(土)	もちだプレーパーク(旧持田小学校跡地)
		29(土)・30(日)	〃
	6月	19(土)・20(日)	〃
		26(土)・27(日)	もちだプレーパーク(旧持田小学校跡地) デリバリープレーパーク(楽山公園)
	7月	4(日)	セタプレーパーク(旧持田小跡地・北公園)
	8月	4(水)・5(木)	デリバリープレーパーク(菅田公園)
		7(日)	平田市プレーパーク(島根県平田市)
		23(月)・24(火)	デリバリープレーパーク(北公園)
		26(木)・27(金)	〃
		30(月)・31(火)	〃
	9月	11(土)・12(日)	もちだプレーパーク(旧持田小学校跡地)
		18(土)	〃
		20(月)・21(火)	〃
		25(土)・26(日)	・プレーリーダー研修(三瓶自然の家)
	10月	2(土)・3(日)	・市民文化祭参加(同市プラバホール)
		11(月)	もちだプレーパーク(旧持田小学校跡地)
		23(土)	・プレーリーダー研修(島根大学)
		30(土)	デリバリープレーパーク(北公園)
		31(日)	・ふるさと祭り参加(同市持田公民館)
	11月	3(水)	・矢郷恵子 氏による講演(島根いきいきプラザ) ¹
		6(土)・7(日)	もちだプレーパーク(旧持田小学校跡地)
		13(土)・14(日)	〃
		19(金)～21(月)	・第3回全国冒険遊び場研究集会に参加(兵庫県)
27(土)・28(日)		「紙で遊ぼう」プレーパーク(同市内中原小学校) ²	

2004年	12月	23(木)	クリスマスプレーパーク(旧持田小学校跡地)
2005年	1月	15(土)	もちだプレーパーク(旧持田小学校跡地)
		16(日)	〃
		22(土)	・清川輝基 氏による講演(くにびきメッセ) ³
	2月	12(土)・13(日)	もちだプレーパーク(旧持田小学校跡地)
		16(水)	デリバリープレーパーク(北公園)
		19(土)・20(日)	もちだプレーパーク(旧持田小学校跡地)
		23(水)	デリバリープレーパーク(北公園)
		27(日)	・プレーリーダー研修(島根大学)
	3月	9(水)	デリバリープレーパーク(北公園)
		16(水)	〃
		19(土)	栗林プレーパーク(香川県高松市林公民館敷地内)
		21(月)	もちだプレーパーク(旧持田小学校跡地)
		23(水)	デリバリープレーパーク(北公園)
		30(水)	〃

※1, 2, 3は、「NPO法人 おやこ劇場松江センター」ならびに「(財) 島根ふれあい環境財団21」 主催『(財) 島根ふれあい環境財団21 平成16年度みんなで選ぶNPO活動リーディング事業』の共催として参加。

I. 活動内容とその概要

A. もちだプレーパーク (持田地区でのプレーパーク)

松江市持田地区の旧持田小学校跡地でのプレーパーク開園。日常的な開園の他に季節ごとのイベント開園などを行った。月4回程度の開園で、計33回の開園。

B. デリバリープレーパーク

持田以外の松江市の公園を中心に行う開園。他の場所での開園によって持田地区の人たちだけでなく、もっと多くの人たちにプレーパークを知ってもらい、親しんでもらうことを目的とした活動。

C. 参加協力イベント

プレーパーク活動以外にも他の団体などに協力・参加して行う活動。H16年度は、計5回行った。他団体へのプレーパークの理解・協力を図る目的がある。

D. 研修

プレーリーダーとしてのスキルアップを目指すもの。講師を招いての講義やロールワーク、応急救護など基本的な内容の他に近隣のプレーパークに夏の期間定期的に向かい、プレーリーダー同士の交流を通し成長していくことを目的とした。

II. 結果

A. もちだプレーパーキング

この一年を通しての遊びは、もちだプレーパーキングの奥の方の土地を開拓していったことが大きい。その一つが常に建設中だった『小さな小屋』である。小屋を拡大していくのはすぐには出来上がるものではない。そのかわり、前のつづき、昨日のつづき。またあした、またこんどとその日1日では終わらない遊びを子ども達は体験できた。

パレットを組み合わせただけの小さな小屋に屋根を作り、自分の小屋にする子は看板に名前を書き始める。そして屋根の上に上られる子は登りはじめ、そこにも新しい部屋を造り始めた。しかし、雨の日は雨漏りが起きた。材料は大量の木材と倉庫にある道具で、あるもので何とかしようとゴミ袋を広げて屋根の下に敷き詰めていた。

この様にして3階も造り始めたが木にぶつかり、小屋がピラピッドの様に次第に小さくなり、部屋も小さくなってしまいうので、子ども達も諦めていた。

上が無理だと考え、次は横に拡大していった(写真1)。ちょうどその頃は、昔あったすべり台をこわし始めた頃(写真2)で、すべり台がなくなったので新しく造り始めた。この頃は梅雨で雨の開園が多くて、雨を凌げる場所が欲しかったので、ブルーシートの屋根を柱と柱を渡して取り付けられるように隣に屋根小屋も造り始めた。

ここで、すべり台は完成予想図のある計画的なものではなく、子ども達の「新しいのがあったらいいね」という思いつきから始まるものだから無計画であったりする。例えば、床は誰でも登れるものではなくて、自力で小屋を這い上がった子だけ滑れるすべり台にしよう！という目的で造っていると、しばらくした日の開園でそんな高いところから長い傾斜を作るだけの木が無いことに気がついた。無理矢理そのときあった一番長い木を使っていたが、三角定規を縦にしたような骨組みになっていた。



写真1. 小屋を造りながら遊ぶ (5月)



写真2. すべり台の解体作業 (5月)

11月頃。すべり台の板を付け始めた。板を取り付けるまでの間にも遊びがあった。骨組みだけの状態だったので足場がいろんな所にあり、小さな子も2階への登り方がいくつあるか発見しながら登り降りをはたすら繰り返すこともあった。それからベニヤ板も取り付け、それらしい形になった。板には塗装をしていたので滑りやすく、こども達も前のすべり台以上のスリルを味わっていた。

その隣ではこわしていく遊びも広がった。この頃は木工作をととても盛んに遊んでいた。梅雨の頃に造った屋根小屋は骨組みを簡単に組み立てただけのもので、単にノコギリで木を切るだけでは飽きてきた子ども達は、柱の解体工事に取り掛かりだした（写真3）。しかし、中には自分より大きく、長さが自分の二倍以上の木もあつたりするので切ると倒れてくるかもしれない。じゃあ、どうするか。そこで出てきたのが「ジャンケン」だった。勝てば解体工事を実行できて、負ければ勿論支える役。結果、負けたのはプレーリーダーだった。そして、無事解体作業で切り倒して子ども達は解散。すると、それを近くで見ていた低学年の子どもは倒れた柱に釘を打ち付け始めた。自分の体がさっきまでの『サッポロゴン太』での泥池あそびで全身泥まみれなのも気にせず、ただひたすら釘を打ち続けた。ここでは造ってはこわす、そしてまた新しい遊びが始まっていた。

年が明けた頃。天気は1日の間に何度も変わりとても寒い。そこで温泉を掘り始めた。その名も『地獄温泉』。掘れば掘るほど水がどんどん出てくる。そして、お湯にするには火が必要である。でも雨が降っているのですぐ火は消えてしまう。ちょうど近くに半分に割れた石臼の様な物があつたので、ブロックに乗せてかまどが完成した。これで火は消えずに済んだ。しかし、まだ自分たちが雨に濡れているので、更に屋根小屋を新しく造り始めた（写真4）。

この様に一年の間で1日だけではできない色々な遊びを子ども達は体験することができた。しかし、そこは借りている土地で、現状復帰を条件に使わせて頂いていたが、元に戻すことや、こども達の造っていったものを残していくときに地域への理解を求めることを怠ってしまい、結果的に一度全て元に戻すことした。「こども達のきもちを大切に」するはずが逆の結果になってしまった一年を通してのもちだプレーパークだった。



写真3. 柱の破壊工事（10月）



写真4. 雨宿りをしては温泉掘り（2月）

B. デリバリープレーパーク

松江市内にある、菅田公園、北公園、楽山公園でプレーパークを開園した。

a. 菅田公園

菅田公園は、きれいに整備された広場のような公園であり、遊具も少しある。普段、泥んこになって遊ぶということはなく、サッカーなどで遊んでいる。

ここでの開園では木工作を中心に遊びが展開され（写真5）、親子連れや常連以外の子が多かったので新たにプレーパークを知ってもらうことができた。また、もちだプレーパークと違って、公園の中心に丘があり全体が見えない分、「隠れる」ことを取り入れた遊びが展開されていた（写真6）。



写真5. 広場での木工作



写真6. 丘の上で木登り

b. 北公園

北公園は、松江市の中心にある公園で川を挟んで両岸に遊び場があり、固定遊具は様々なものが設置されている。普段から利用者は多いのでプレーパークを知ってもらうために、デリプレは北公園を中心に活動した。

10月の開園で、1日が終わりかけた頃。屋根に登った女の子は、飛び降りるのが怖くて屋根の先の所でじっとしていた（写真7）。横にはロープがあるから、登ったことの反対をすれば降りることはできる。でも、それまでに自分より小さな子どもが余裕で飛び降りているから、自分も飛びたい！…でもやっぱり怖い。そうして30分程じっとして、ついに飛び降りた。その後、女の子は「お母さん！見た？あたしあそこから飛んだよ！！」と、とても喜んでいました。

自分で自分の限界に挑戦しながら遊ぶ（写真8）。そして、遊ぶ中で成長していく。そんな場面があった。



写真7. 飛び降りるのが怖い女の子



写真8. 自分の力で屋根に登る

c. 楽山公園

楽山公園は、他の公園や旧持田小学校跡地と違い、山の中なので、周囲は大きな木や山がある。ここでは定番のベーゴマやべっこうあめ作りに加え、山の探険、池でのザリガニ釣り（写真9）などの遊びがあった。

山の探険では、道に迷ったり斜面を下るときに滑ってしりもちをつくこともありながら、途中の道ばたにあった草木の名前当てをしていた。

また、滑車とロープを使ってターザンロープを作りだしたが、ロープが弛んで思うようには遊べていなかった。しかし、しばらくして弛んだロープにもたれかかって、地面すれすれで止まるスリルを楽しみだした。当初の目的だったターザンロープは失敗に終わったが、そこから次の遊びへの発展がここでは見られた（写真10）。



写真9. 池でのザリガニ釣り



写真10. ターザンロープ

C. 参加協力イベント

a. 平田市プレーパーク（8月7日）

松江市に隣接する平田市にある地区の親子会から依頼を受け開園をした。場所は公民館の広場で、とても暑い日に日陰も少なく熱中症が心配されたが、保護者の方が水分の準備等の協力してくれたので、十分な準備ができた上で開園ができた。

当日の遊びは、竹のジャングルジム『サイズー』（写真11）、ターザンロープ（サイズーとフェンスをつなぐ）、あそぼうパン、べっこうあめ作り、ベーゴマ、竹とんぼ作りなどが中心で、自分なりに遊びを広げていく子もいた（写真12）。

平田市での開園したことがないので、初めてプレーパークで遊ぶ子どもが多く、始めはどう遊んでいいのか戸惑う姿が見られたが、竹を切り、それにあそぼうパンの生地を巻いて焼くプレーリーダーの様子を見て、子ども達はもちろん、保護者の方も興味を示し、自然と遊びに入っていた。

また、保護者の方はベーゴマに特に興味を示し、子どもと一緒に本気になって勝負をしていた。他にも、ダンボールを何枚も使って囲い、ブルーシートをかぶせてそこに水を溜めてプールにし、服のまま入ったり、そこへ向かってスライディングをしたりするなど、ダイナミックな遊びも見られた。夕飯は、保護者の方がカレーライスを作ってくださり、みんなで輪になって頂いた。

普段と違い、保護者の方が常におられたので、禁止事項を設けない遊び場で、自由に遊ぶ子ども達の様子を間近で見ることができ、プレーパークの魅力を感じてもらえたと思う。



写真11. 竹のジャングルジム



写真12. 小刀を使って竹とんぼ作り

b. 市民文化祭（10月2, 3日）

市の主催によりプラバホールで市民文化祭が開催され、飲食店やフリーマーケットなど、10店舗ほどの出店があり、大勢の人が訪れた。私たちは、ベーゴマの実演とフリーマーケットを行った。初日はあいにくの雨で会場には人が少なく、建物の下で雨宿りをしている状態だったが、ちょうどベーゴマもそこでしていたので注目を浴び、初めてベーゴマを触る人も多くいた。そこで2日間ベーゴマ大会を開催することにした（写真13）。子ども達は自分のベーゴマをヤスリで削ったり色を塗ったりして改造し、優勝を目指して練習用のベー床で必死に練習していた（写真14）。

他にも、ふわふわドームでの子どもの誘導や、着ぐるみを着て会場を回るなどのイベントを手伝いながらプレーパークの宣伝も行い、松江の方々に知ってもらうことができた。



写真13. ベーゴマ大会



写真14. 改造したベーゴマで練習

c. 持田地域ふるさと祭り（10月31日）

持田での地域行事。普段交流できない方々といろいろと話すことができた。プレーパークをほとんどの方が知っておられたことはよくわかったのだが、その詳しい内容までは、知らない方が多くおられた。これからも地域行事などに参加していく中で、プレーパークのことについて広く理解して頂きたいと思った。

d. みんなで選ぶNPO活動リーディング事業（11月3, 28日, 1月22日）

乳幼児期にテレビ・ビデオ等を見せることの体やメンタル面に及ぼす影響を基調講演とし、実際に空いた時間の活動として「あそぶ」、「つくる」、「きく」、「たべる」の4つのテーマを掲げた。そこで、私たちは「あそぶ」を担当し、NPO活動リーディング事業の一環として、同市内で活動する『城西プレーパーク』と共催で、同市内中原小学校体育館で「紙で遊ぼう」というワークショップを行った。

当初は、**はじめに** で挙げたように自然の土や水や虫などとふれあい、五感を十分にひらいて満足するまで遊ぶことができるように、もちだプレーパーキングの場所を検討していた。しかし、これまで乳幼児を外で遊ばせる機会の少なかった親子には、秋の冷え込みのきつくなる時期に外で、しかも天気によってはぬかるむ場所というはハードルがきついと見え、第一ステップとして、体育館での紙を使ったあそびを行った。

ここでは、段ボールや、トイレトペーパー、ポスター、新聞紙などを体育館が埋め尽くされる程準備し、色々な形や肌触りの素材をたたいたり、投げたり、並べたりする遊びが展開された。

今回のイベントの参加者数の多さから、松江市の人々の、子どもの遊びに対する関心の高さを知ることができた。

e. 栗林プレーパーク（3月19日）

香川県高松市の“栗林プレーパーク”にプレーリーダーとして参加した。ここはプレプレまつえキッズ発足の際、多大なご協力をいただいた現・香川大学助教授の清國先生が中心となって地域の人々と共に開園・運営をしているプレーパークである。

今回は2周年記念の開園日ということもあってか、地域の大人の方がたくさんおられた。場所が公民館の内庭なので敷地が教室2部屋分程と狭く、その上子どもが大勢いて個々の遊びが密集した中で、泥遊び、ペンキ遊びが主に展開された。

準備の段階で、木材の他に、遊べる自然の素材として土を準備することにし、近くの畑から一輪車で一台分頂いた。

土を使った遊びは、普段あまり使っていない素材のためか、子ども達は興味を持っていなかった。そこで、遊びの取り掛かりとして土を捏ねることとした。それに対して、どろだんごづくりを子ども達は想像し、久しぶりにと造り始めていた。また、焼き物をしようと火の中に入れれば、焼き団子を水に入れるとガラスのように割れるか？ペンキを塗るとどうなるか？と色々な方法を試していた（写真15）。

また、片づけの中にも遊びがあった。泥遊びや、ペンキで遊んだので建物も少なからず汚れたので、自分たちでブラシを使って落とすことになった。しかし、仕方なくされられることには、反対の行動も見られ、泥の付いたブラシで擦りだした（写真16）。それに興味を示した子は同じように汚し始める。ここで、学校などの教育の場では汚す子どもを注意してしまうが、遊び場ではそれは違うと考え、あえてプレーリーダーは止めずにいた。

当然ここでは、消す人と汚す人でケンカは起きる。もし、ここで止めていれば汚した子は注意を受け、片づけも速やかに終わっていたはずだが、止めないことにより、問題に対して当事者の子ども同士で解決していく力を育めたと考えられる。

この日は、NHKの取材が来ていて、普段なかなかできない遊びができることを伝えることができたと考えられる。



写真15. 畑の土を使って泥遊び



写真16. 片づけもあそび

3. 成果・課題

I. 成果

子ども達は、冒険遊び場・プレーパークを通じて、一番に自分のやりたいと思う遊びが出来たのではないかと考えられる。大人は今までに積み重ねてきた経験により、危険や状況判断を行うことが出来るが、子ども達はまだその経験が少ないため、その先の結果を想像することが難しい。そこで、多少のリスクを伴いながら様々な経験を積むことにより、次に失敗しないためにはどうすればいいかを学んでいく。そしてその過程をプレーパークで経験することが出来たと考えられる。

また、描く道具としてプレーパークには水性ペン、ペンキ、チョークなどがあり、普段これらは紙の上に描くものとして使われる。だから平面に限らず凸凹した様々な形の所に描くことも大切である。その素材として自分たちで決めたルール付きでプレーリーダーになることもある。ここで禁止事項ではなくても遊びの中にはルールがあるのと同じで、ルールを破れば子どもに対して本気で怒ることもある。そこで自由な遊びの中から相手に対して何をしてはいけないかという人間関係を学ぶことも出来たと考えられる。

そして、プレーパークは単に子ども達の遊び場というだけでなく、社会的役割を担うことができると思う。地域の方々がプレーパークを訪れることで、子ども達にその地域の風習や伝統などを伝えていくことができ、子ども達は、地域の方と触れ合うことでの世代間での交流をもつことができる。様々な世代が集まるということで、保護者の方同士が子育てに関して悩んでいることや困っていることなどを相談しあえる場にもなっている。

II. 課題

プレーパークは、地域の方々の協力や理解がなければ成り立たない。この活動を今後とも継続していくためには、よりいっそうの地域の方々の理解・協力が必要となる。もちだプレーパークでの常設の遊具は、開園していない間の管理の仕方や遊具の拡大を行うときの地域への理解を求める事が不十分であったため、団体としての不信感を持たせてしまった。そこで、今後理解を求めていくためには何が必要なかを模索していく必要があると考える。